

農業高校の学びの充実懇話会
とりまとめ

令和6年12月27日

農業高校の学びの充実懇話会

I はじめに

平成28年度に開催した「鹿児島県における新しい農業教育推進のための検討会」の提言を受け、県教委では、平成30年度から「新しい農業教育推進プロジェクト」において、最先端の技術を導入している県内農業法人等への視察研修や高校生の海外研修など3つの取組を実施している。

さらに、令和3年度から「かごしまの次代を担う農業教育推進事業」として、生徒がGAP、HACCP、6次産業化などを学ぶ出前授業や教員向けのスマート農業関連機器に関する研修など3つの取組を追加し、提言の更なる具現化を図っている。

また、各学校においても、生産技術の習得や販売活動を基本としながら、地域農業と連携した特色ある教育活動に取り組んでいる。さらに、日頃の学びを発展させて、和牛甲子園やエコワングランプリなどのコンテストにも挑戦し、優秀な成果を収めている。

一方で、少子化等の影響により、依然として農業高校への入学者は減少傾向にあり、今後もさらに少子化が進むことから、農業や農業関連産業の担い手確保の上で農業教育のさらなる充実が必要であると考えている。

このため、懇話会では、大学等の学識経験者や、農林業に関する専門家、農業経営者等の有識者により、様々な視点で農業高校の現状や課題を分析するとともに、農業高校の学びや教育環境の充実に向けて、4回にわたり議論してきた。

このとりまとめを参考に、今後、農業高校の学びや教育環境がより充実し、本県の農業の担い手や農業関連産業を支える人材が育成されることを期待する。

2 懇話会の開催状況（年4回開催）

回	開催日	テーマ
1	令和6年6月26日(水)	農業高校の現状と課題
2	令和6年9月4日(水)	農業教育における教育内容の改善・充実に 向けた取組 ○ 社会や産業の変化の状況等を踏まえ、持続可能な社会の構築、情報化の一層の進展、グローバル化などへの対応 ○ 農林業における経営感覚の優れた次世代の人材育成に向けた指導の充実 ○ 地域や産業界等との連携した実践的・体験的な学習活動の充実
3	令和6年10月29日(火)	農業教育における教育環境の改善・充実に 向けた取組 ○ 計画的な施設・設備の改善・充実・更新，生産や販売実習等の学習活動を円滑に実施するための環境整備 ○ 農業大学校や大学等との連携・協力の促進 ○ 教員の資質・能力を向上させるための研修の機会等の充実
4	令和6年12月27日(金)	鹿児島県の農業を支える人材育成への取組 ○ 懇話会のまとめ

3 懇話会で出された意見

(1) 農業高校の現状と課題

- 農業高校は様々な取組を実践しているが、単発的な取組が多いと考える。年間を通じた取組を行うことが教育内容の充実につながると思う。また、先生方の異動によって特色ある教育活動が継続しにくい課題がある。地域との連携の在り方等についての研修会やマニュアル化等を通じて、担当者が変わっても特色ある教育活動を継続できると考える。
- 県内農業高校の素晴らしい取組を初めて理解した。農業に携わっている中で、これまで農業高校の教育内容を知る機会がほとんどなかった。工業高校などは、夏休みのものづくり教室などのイベント情報を発信しており、小学生が参加し、興味を持つことで、子どもたちは、既に将来の進路選択が始まっていると言える。農業高校も現在実施している昆虫標本の取組の発信を小学校等にも行うことで、小学生が早いうちから農業の面白さを知る機会を得るのではないかな。
- これまでの取組を見たとき、現地に赴く必要があるため、予算や人員の制約があり、単発の取組になる可能性がある。オンラインを活用することで研修の機会を増やすことが重要である。
- 各学校でホームページやインスタグラムを通じて、情報発信をしているが、本県の農業高校が取り組んでいる事例を掲載する共通のホームページを制作して、各学校で特徴のある実習内容等も掲載すればよいのではないかな。そうすることで、情報発信だけでなく、各学校間の教育内容が共有でき、各農業高校の学びの充実につながると思う。
- 各高校、県教委も学校の特徴など、様々な情報を発信しているが、そもそも食や農業に興味がない子には情報は届かない。情報を受け取るためには、子どもたちの食や農業に対する興味関心が育まれていることが必要。そのような子どもたちを育てるためには、学校だけではなく、県全体で取り組む必要があると思う。

- 高校の特色をもっとPRし、中学生やその保護者に対して高校の魅力を伝えるべきである。特に農業高校のように普通高校では学べない分野があることを知らせることが必要である。
- 高校や農業大学校のSNSなどデジタルを活用したPRについては、堅苦しいものではなく、生徒や学生たちの生き生きとした様子が分かるものが重要だと考える。
- 専門高校には学区がないことから、農業高校がない地区に、もっと農業高校の良さや寮があることなどの情報を発信すべきではないか。例えば、始良、加治木地区には農業高校がないため、寮のある学校に入学して、農業を学ぼうと考える生徒がいるのではないか。
- 専門教育の実習において、1年生の農業基礎は共通で学ぶが、2年生になるとコースや専門の選択に分かれる。生徒数が少ないため、各作物や畜産の実習が厳しい状況もあり、家畜の種類や頭数を減らすことも考えないといけない。一方で、少人数教育のために指導が行き届き、安心安全な教育ができているというメリットもある。

(2) 教育内容の改善・充実について

- 商業や工業といった異なる教科との連携を行っている事例がある。農業高校でも、他の教科と連携して取り組むなど、教科横断的な学びを充実させることも必要ではないか。また、農業高校同士で学びの共有や共同で研究に取り組むことも、教育効果を高める上で必要ではないか。
- 農業高校の教育内容を充実させるために、学校の学びをコーディネートする人を配置することが必要ではないか。そうすることで、地域とのコミュニケーションや研修、視察等の段取りも充実し、継続性が生まれるのではないか。そのようなシステムを構築できればよいと考える。
- コーディネートする人材として、行政などの外部人材なのか、教員なのか県外の事例を参考にしながら検討することが必要である。

- スマート技術の活用は、あらゆる分野で進んでいる。人口減少社会における後継者育成には、スマート技術の活用は当たり前になってくる。業界としてもスマート技術を活用した出前授業については協力できるので、ぜひ活用してほしい。
- 入学者が減少する中で、生徒一人当たりの敷地面積が増大していることが課題。農業高校では、農地も含めた校地の整備が職員・生徒の手で行われていることから、農業高校の広大な農地の利活用について地域や関連事業者と連携していくことで、学びの充実や農地の維持管理ができるのではないかと考える。また、広大な敷地の管理には、スマート農業機器も有効であることから効果を考えながら、積極的に活用すべきである。
- 農業高校における農業に関する全般的な教育は、農業の理解者を育てる意義があると理解しているが、そういった学校とは区別した担い手農家を育てるための農業高校も必要ではないかと考える。
- 農業高校においても、循環社会を確立するために規格外の農産物の販売や利活用、自社で生産した農産物のファンをつくるためのSNS等の活用方法を授業で学ぶなど、経営の視点を養う教育も必要と考える。
- 農業高校全体で共通のオンライン授業を導入することで、教育の質を向上させることができる。また、家畜防疫の観点からも、畜産業界との連携をオンラインで行うことが有効である。
- 県内の農業高校で学ぶ教科が同じであれば、オンラインにより一人の先生が発信することで、学びが共有され、先生方の業務が省力化されるのではないかと考える。

- 今行っている各学校の取組や今後、学びの充実に向けた新しい方法を試した場合は、アンケートの実施など、必ずその効果を検証する必要がある。そこから、次の一手が見いだせる。
- 本懇話会の意見等を踏まえ、農業高校の学びの充実を目的とした「農業後継者育成プロジェクト」等の組織を行政や関連団体等で組織化すべきだ考える。そこで、プロジェクトの方向性を定めた上で、優秀な農業経営者や専門家を学校へ派遣したり学校外の研修プログラムを実施したりする等、組織的に継続した学びの充実を図る必要がある。
- 高校では学習指導要領に基づいた教育活動を行うため、本懇話会の全ての提案を取り入れることは難しい。学びの充実を農業高校だけで行うのではなく、関係機関や企業などと連携できる仕組みづくりが必要。農業高校に対して、例えば、農業後継者育成につながるような研修メニューを学校側に提言していくのもよいのではないか。
- 企業の取組で、枝肉共励会に出場した農業高校生に、海外を含む牛肉の流通について学ぶ勉強会を実施している。一昨年から、高校生が作った牛肉を会社で買い上げ、各地区の子ども食堂に提供し、そこで、高校生たちに肉を提供するまでの過程について、子どもたちへ話をしてもらう。そのようにすると生徒の自信にもなり、子どもたちにも農業の魅力が伝わる。農業の実体験や魅力を伝える場作りをする必要があり、民間、行政、教育庁が連携すれば、まだ良いものができるのではないかと考えている。

(3) 教育環境の改善・充実について

- これまでも、農業高校は、農業大学校や鹿児島大学と学びの充実のために連携しているが、出前授業など単発的な取組が多い。今後、農業大学校と農業高校、あるいは鹿児島大学・農業大学校・農業高校が共通テーマで、地域の課題解決や地元資源の商品化に向けて継続したプロジェクトに取り組むというような連携も進めていけないものか。高大接続の観点からも意義があり、入学後にそれらの研究を継続できることが理想である。
- 農業技術が進歩する中で、農業高校の教員が学校内に閉じこもることで、世の中の変化を把握できず、生徒に最新の知識を還元できない問題がある。教員が研修や視察に参加するための、予算措置を講じることが重要である。
- 教員の研修については、各種情報誌等の活用や通信教育など、自己研鑽に努めることも必要であるが、県が行っている研修等をさらに充実させることで、先生方の資質・能力が高まると考える。また、受講後に先生方が学んだ内容を広く周知する機会を構築していくことで、教員の全体的な資質向上を図ることができる。
- 教員は専門性が高い仕事であり、自分の専門を高めることも必要であるが、それだけではなく、農業に関して必要な総合的な知識を身に付けることも大切である。例えば、農業を食料産業として総合的にとらえた上で、教育の方向性を考えられる現場のコーディネート力を備えた人材の育成も重要ではないか。また、生徒たちが学びや進路に関する悩みの相談ができるメンターを担う人材も今後必要と感じている。

- 農業教育に必要な機器の導入・維持にはコストがかかるため、機器の使用については、関連団体から協力をいただいたり、リースで対応したりすることも検討してはどうか。
- 教育環境の整備には、寮や校内の交流スペースを整備するなど、生徒が快適に学校生活を過ごせる要素もあり、これらを整備することが、志望者数にも影響するのではないか。
- 施設設備の整備といったハード面，コース制の導入といったソフト面を充実させ魅力的な農業高校にするためには，地域の実情等もあると考えるが，一定の学校規模が必要ではないか。
- 県外の農業高校で充足率が高い学校があるのは理解した。他県が農業高校の数が少ないのか，本県の農業高校の数が多いのか，生徒数等の関係はどうなのかを検証すべきではないか。
- 農業高校を寮のある学校に集約するなども必要ではないか。現状で全ての学校が安泰とはいかない。
- 人口減少が進む中，計画的に農業高校を減らすことも必要ではないか。今の学校数を維持して様々な対策を講じても，同じことを繰り返すだけではないか。学校の運営・維持のためのコストを考えても，農業高校の集約化は必要と考える。集約化によって学びの充実につながれば，県民からの理解も得られるのではないか。

(4) その他

- 今の子どもたちがちょうど40代の中堅になる2050年には人口100億人とも言われる。食料危機に陥ってから人材を育成しても遅い。農業をしていなくても、農業ができる人材を育成しておくことが必要。小中学生や小中学校の先生方を含め、今、食の大切さをアピールして、食に対する興味・関心を高めておかないと将来の準備はできない。
- 消費者の中には、野菜等は、「きれい、安い、新鮮なもの」という意識があるが、世界には食糧危機に陥っているところもある。消費者一人一人が農業（食料）の大切さを理解するとともに、地域では最低限の担い手農家が必要であると広く社会が認識するべきである。
- 農業も稼げる産業だとアピールしていくことも必要。また、中山間地を含む地域の環境保全という社会貢献にもつながるという点も含めて、農業の意義や魅力を伝えていく必要がある。
- 農業高校の入学者数減少については懸念されているところだが、農業高校の重要性を理解してもらうためにも、「食」の大切さを、地域ぐるみで子どもたちや保護者世代にも認識を高めてもらうことが必要。農業県だからこそその食農教育の取組を充実させることが必要。
- 小中学生へ農業の良さを伝えることは重要である。中学校での就業体験学習は商業系施設が多いように感じる。農業水産関連についても組み入れてもらえればよいのでは。
- 家庭の中で、情操教育の一環として家庭菜園で早いうちから収穫する楽しみを体験することが重要で、小中学生に収穫の喜びを繰り返し体験させることで、産業に興味をもってもらいたい。

- 農園で生産されているような有機野菜など、美味しいものを子どもたちに食べさせるために、地元の野菜を活用することが重要である。給食を通じて地元の野菜を提供し、子どもたちに美味しさを教えることが大切である。有機野菜の価値を伝え、食の文化を育てることが必要である。
- 企業の実組で、地元の小学校とも連携し、農業のかっこよさ（魅力）を伝える取組を行っており、遠足で牧場に訪れ、スマート農業の見学や、牛の搾乳などを体験している。牛肉やミルク、チーズの生産過程を学び、牛肉を試食することで、子ども、保護者、先生方が農業の重要性を実感できる。

令和6年度農業高校の学びの充実懇話会 委員名簿

◎委員長

○副委員長

区 分	氏 名	所 属 等
学識経験者	◎大久津昌治	鹿児島大学農学部農学科准教授
	○都外川総明	農業開発総合センター農業大学校 教修部長兼農業研修課長兼教授
民間企業等 関係者	東園 健一	鹿児島県農業協同組合中央会教育部長
	迫間 博文	鹿児島県森林組合連合会 参事（第1回のみ）
	野村 輝明	鹿児島県森林組合連合会 代表理事専務（第2回～）
	上村 昌志	株式会社カミチクホールディングス代表取締役社長
	谷口 誠一	たからべ森の学校校長
	木場 俊行	株式会社いちごハウス木場会長
	園山 祥子	農業生産法人そのやま農園株式会社
行政関係者	中山 博之	鹿児島県農政部経営技術課 技術主幹兼就農対策係長
	永吉 健作	鹿児島県環境林務部森林経営課 林業大学校開設準備班技術主幹
学校関係者	増永 泰久	鹿児島県立鹿屋農業高等学校長
	米森 剛	鹿児島県立市来農芸高等学校長